

ああ 病院食

入院一日の食費代として一挙千円近くとられるようになる。年金生活者にとって、まさに暴政のうらみは深い。冷えきったあの食事、どこの食堂でそれで金をとる所があるのか。

砂をかむようにして飲みこんだあの病院食。医大病院に入院、月余の期間、温かい食事は数回だけだった。配膳車は各膳ごとに温冷に仕切られる最新式のもの、それを機能させていない。患者不在の見本である。

温かい食事、食欲のわく調理を工夫している病院は、例外なく治療水準は高く、著しく好評である。食事は医療と一体、病院食は生命線であるからである。しかし、現状は医療、福祉両施設共に温食実施にはまだ程遠い。心ないことだ。心とは手間ひまかけること。

「ではお前の施設はどうか？」と聞かれるだろう。恥ずかしい。やっと一年前からするようになった。入院してはじめて絶対温食実施に気づいたからである。調理して

食膳にのせるまで時間がかかる。だから、温蔵、冷蔵庫に入れておき、食する直前に目の前で盛り付ける。三度のお汁は鍋なべごと熱いプレートにのせておく。設備と人手の貧弱な任運荘・騰々舎でもこのていどのことはできている。

新設の「なごみ塾」も、在宅老人二十人ほどに日曜祝日を除いて毎日食事配達を始めた。配達車に温冷設備を工夫しているから、山間部まで二時間以上かかっても、温かいものは温かく、冷たいものは冷たくお届けできる。

職員に心があればこそである。

(一九九四年八月二十五日)